


 巻頭言

常識に囚われず柔軟に。

岩手県久慈農業改良普及センター **かつ べ かず のり** 部 和 則



私たち植物防疫に携わる者であれば、誰しもが手にしたことのある『牧野日本植物図鑑』。その著者である牧野富太郎博士の生涯をモデルに描くNHK連続テレビ小説「らんまん」を出勤前に視聴するのが、この4月から私の日課となっている。

ドラマの展開や「植物学雑誌」「石版印刷」「ムジナモ」「ヤマトグサ」などをキーワードに、高知県立牧野植物園がHPで紹介する博士の年譜・業績の記述や、私の手元にある「牧野富太郎とマキシモヴィッチ」（2000年、高知県立牧野植物園監修）を重ね、改めて博士の人物像に彩付けていくことを楽しみにしている。

岩手大学のミュージアム植物標本室には、牧野博士と縁の深いC.J. MAXIMOWICZ博士の採集助手を日本で務めた須川長之助作製の“さく様標本”680点が保管されているという。この標本は、1997年に岩手大学附属図書館に一時移譲されるまでは、農学部の植物病理学教室において、盛岡高等農林学校時代からの歴代教授が収集した植物および病理標本とともに長く保管されてきたとのことである。学生時代、この植物標本が身近な場所に保管されていることは、恩師である高橋壯教授（当時）から伺ってはいたものの、恥ずかしながら、手に触れた記憶がほとんどない。

このドラマ「らんまん」の視聴を通じて、“飽くなき探求心”という言葉を想起し、自分を反省し、そして、この思いが薄れないうちに、岩手大学の植物標本室を訪れ、改めて貴重な標本をじっくりと眺めてみたいと思っている。

さて、私は、この4月から岩手県沿岸北部の久慈農業改良普及センターに勤務している。久慈地域はヤマセ常襲地帯で、夏の冷涼な気象を利用した“雨よけ”ハウレンソウ栽培が盛んである。1980年の水稲大冷害を契機として、岐阜県飛騨地方を参考に、パイプハウスでの夏季の栽培様式が導入された。販売額は2001年の10億円をピークに、2018年は5億円、最近では3億円前後で推移しており、産地としては、この3億円の維持が当面の目標となっている。

この生産額の大幅な減少には、生産者の高齢化・離農といった背景のほか、ヤマセの減少と夏（6～8月）の高温経過に起因する生育停滞や高温障害等、また、萎凋病などの土壌病害、ハウレンソウケナガコナダニ等の被

害が影響している。

冷害年でも安定した収入源となっていた雨よけハウレンソウであるが、20℃前後とされる生育適温を大きく超えた気象下では、遮光や生育中灌水といったこれまでの手法とは異なる新たな管理技術が求められている（ミスト制御等）。

2021年に気象庁が公表した「平年値」（統計期間1991～2020年）によれば、全国的に最高気温35℃以上の猛暑日が増加し、最低気温が氷点下の冬日が減少しているほか、日降水量100mm以上（大雨）の日数が増加している。線状降水帯等の発生により、国内各地で河川氾濫や土砂災害などにより、大規模な農林水産被害も毎年のように起きている。温暖化等によってもたらされる様々な異常気象が実は“当たり前”になりつつある。

ところで、メジャーで活躍している大谷翔平や菊池雄星を育てた花巻東高校佐々木洋監督の野球部“経営方針”が面白い。これまで高校野球の常識としてきた練習方法が生徒一人ひとりの才能を潰す恐れがあるという。このため、経営者の感覚が高校野球の指導に必要で、いい選手を集めるためには、一人ひとりの特徴、特技にあわせた指導と適材適所の配置（守備、走塁、打撃など）が重要としている。また、生徒たちには、甲子園の先の目標、自分なりの将来の姿をイメージさせて、いま、そのために何をするか。マイルストーンを明確にした目標ノート（花巻東野球部フィロソフィー）を作らせ、練習に取り組ませる。自主性を重んじたカイゼン提案を受け入れ、指導者は実現に努める。まさに、組織運営の基本であり、課題の計画立案・管理等の基本と一致する。

農業生産の安定を支える植物防疫という分野は、温暖化に伴う新奇発生病害虫への対応、発生様相の変化・多様化等、ますます重要性が増している。そういった中、漫画家・竹良実氏の「植物病理学は明日の君を願う」を通じて一般市民から注目を受ける機会を得ている。“植物防疫の常識”に囚われないストーリー展開もあり、毎月の連載を楽しみにしている。これを機会として、市民が植物防疫に“興味を持ち、参加してみたい”と提供いただけるような、市民目線でのシンポジウム等の企画を考えてみてはどうだろうか。

（北日本病害虫研究会 会長）